



『第29回 武四郎まつり』での シーニックバイウェイPR展示

～〈シーニックバイウェイ×北海道遺産〉の取り組み報告～

「第29回武四郎まつり」が、三重県松阪市にて開催されました。探検家・松浦武四郎は、「北海道」と命名した人物で、踏査した内容を日誌や地図に残し、「天塩日誌」では北海道遺産・天塩川も紹介されています。

天塩川を有するルート为天塩川シーニックバイウェイと北海道遺産、(一社)シーニックバイウェイ支援センターでブースを設け、シーニックバイウェイの取り組みや北海道のドライブ観光、北海道遺産の紹介などを行いました。隣のブースでは、音威子府村の活動団体nociw(ノチウ)が、天塩川流域の商品(名寄・美深等)も販売、雨天にも関わらず、沢山の人に来ていただきました。松阪市民の武四郎に対する想いや知識も豊富で、北海道との繋がりを強く感じられるととてもいい時間でした。



お昼の時点で音威子府蕎麦は完売!その他の商品もイベント終了時には完売しました。



鮭が入っている
石狩鍋のような具材と、
甘い味噌味の「武四郎鍋」も
会場でいただきました!



北海道に住んでいた人、これから行く予定の人、天塩川でカヌーしたことがある人、様々な想いを持って立ち寄ってくださいました。



武四郎記念館 元館長の高瀬氏に、武四郎誕生地(生家)や伊勢街道などをご案内いただき、感動。



「シーニックドライブマップ 2024年度版」発売中! 定価250円(税込)

「シーニックドライブマップ2024年度版」が発売中です!特集は、北海道ならではの絶景が待っている「秀逸な道」。その他、道の駅のパンを紹介する「道の駅のパン」、地元ならではの「シーニックなカフェ」を掲載しています。



「道の駅」マップ付き! 全道の道の駅で購入できます!

編集後記

先日、初めて稚内にある「白い道」に行ってきました。なだらかに広がる宗谷丘陵の中を通る真っ白な1本道は、青空とのコントラストが素晴らしく圧巻の景色でした。白い道は、廃棄物として捨てられていた木タテの貝殻をリサイクルして利用されており、3年に1回撤かれ維持されているそうです。ちょうど貝殻が撤かれたばかりの時にいったので、より白さがはっきりしてきれいでした。白い道はフットパスのコースにもなっているので、これから季節に歩くのはとても良さそうですね。みなさんも稚内方面に行く機会があれば、ぜひお立ち寄りください!ほんと素晴らしい景色ですので! (M.K)

青空に映える白い道(カラーじゃないのが残念…)



dec monthly vol.464

2024年5月1日発行

発行人

倉内

公嘉

発行所

一般社団法人

北海道開発技術センター

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

TEL (011) 738-3363

FAX (011) 738-1889

URL <http://www.decnet.or.jp/>

E-mail dec_info01@decnet.or.jp

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

TEL (011) 738-3363

FAX (011) 738-1889

URL <http://www.decnet.or.jp/>

E-mail dec_info01@decnet.or.jp

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

TEL (011) 738-3363

FAX (011) 738-1889

URL <http://www.decnet.or.jp/>

E-mail dec_info01@decnet.or.jp

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

TEL (011) 738-3363

FAX (011) 738-1889

URL <http://www.decnet.or.jp/>

E-mail dec_info01@decnet.or.jp

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17



Hokkaido Development Engineering Center

dec monthly

2024.5.1 vol.464 デックマンスリー



● Monthly Topic (マンスリートピック)

dec設立40周年記念事業

冬のくらしアイデアコンテスト発表会

● dec Report (デックリポート)

dec設立40周年記念事業のご紹介

dec Interview >>> 一般社団法人北海道開発技術センター 理事、地域政策研究所 所長 原文宏氏

decが任意団体として誕生したのは1982年。社団法人化を経て85年に初のプロパー職員1名を採用。それが原文宏理事でした。以来、decの礎を築き、事業展開を牽引してきた原さんに40年の歩みに寄せて、しばし思いを語っていただきました。その一端をご紹介します。

まず、dec入社の経緯についてお願いします。

1978年に北海学園大学工学部を卒業後、札幌の建設コンサルタント会社に就職して橋の設計の仕事をしていました。一人で、測量・設計から積算まで一通りの業務を手掛けたのはいい経験だったけれど、一般的な橋の設計はかなりパターン化していて同じような仕事を何度も繰り返すのが僕の性分としては苦手だった(笑)。

「もっと未知の『よくわからないこと』を探究したい」という思いで仕事とは別に個人的に参加し始めたのが「寒地開発研究会」。寒地開発技術の交流と海外移転推進を標ぼうする研究会で、主宰の一人が当時、北海道開発局土木試験所職員の佐々木晴美さんでした。佐々木さんは僕が北海学園大在学中に講義をしに来ておられ、卒論でもお世話になった恩師の一人。そういうご縁もあって参加した研究会には行政や研究機関、民間企業から有志30〜40人が集っていました。

この研究会が主体となって83年1月、札幌市で開催されたのが「北方圏開発技

術交流会議」(「第1回寒地開発に関する国際シンポジウム(ISCORD)」)。僕は事務局運営に研究会の一員としてボランティアで携わりました。かなりの力仕事だったけれど、とても刺激的で楽しかった。

一方で、decは82年に設立されており、84年度に佐々木さんが専務に着任して最初の正職員を雇用する際に声がかかったのが僕でした。

入社の1985年は11月に「第1回寒地技術シンポジウム(CTC)」が開催されますね。

まさにdecでの初仕事はCTCの開催準備でした。7カ国参加の「北方圏開発技術交流会議」の成功により関係者間で「国内版をぜひやるべき」との声が盛り上がったのです。従来、寒地技術は土木、建築、機械など分野別にタテワリで議論されており、もっと横断的に交流する意義を唱える研究者も少なくありませんでした。特に当時、北大工学部教授で氷工学が専門の佐伯浩先生には、「氷工学で20編ぐらいは発表するから」と言っていたので、応援団として強力な後ろ盾になっていただきました。

運営事務局の僕も、できるだけ幅広く参加を呼びかけようと、行政、大学、研究機関はもとより消費者協会や防寒商品を扱うデパートまで声掛けをしました。論文書きに慣れていない人には僕が代筆したり、とやっていたら、結局106編と想定外の数の多彩な論文が集まり、参加者は確か200名以上。参加費

住民から専門家まで、領域や立場を越えて交流できるプラットフォームをつくり、支えていくのがdecの大事な役割。そこから、たくさんの「北海道発」を生み出すきっかけをつくっていききたい。

dec Interview

はら ふみひろ

1955年北海道赤平市生まれ。78年北海学園大学工学部土木工学科卒業後、北海道鉄橋コンサルタンツ株式会社、橋梁設計に従事。85年社団法人北海道開発技術センター入社。在職中の92年北海道大学大学院工学研究科修士課程に入学し、97年同博士課程修了。博士(工学)。2002年からdec理事、10年からdec地域政策研究所長を務める。(一社)シーニックバイウェイ支援センター業務執行理事、認定NPO法人ポロクル理事、認定NPO法人ほかいどう学推進フォーラム理事。共著に「野生動物のロードキル」ほか。人生唯一の趣味は「年齢と体力を確かめるために乗る」自転車。

を取ったこともあり、直接経費だけですが収支は黒字になりました。僕はくたびれ切ったけど(笑)。

主催関係者はみな喜び、打ち上げて「これは毎年やるべきだ」との声多数。その通り、decのメインイベントとして今年で第40回を迎えることになりました。



第1回寒地技術シンポジウム開会式
当時の堂垣内尚弘会長(元北海道知事)の挨拶、板垣武四札幌市長に来賓として参加していただきました。

80年代後半以降、北海道開発庁が推進する「ふゆトピア事業」や札幌市の「北方都市会議」に関連した受託など、decのフィールドは道内各地、海外へと広がっていきます。

「ふゆトピア事業」は快適な冬の生活環境づくりを目指した総合的な施策ですが、その関連で特に僕が深くかかわったのは、札幌、旭川、小樽の3市の雪対策関連の計画策定業務でした。特に札幌市の「雪さっぽろ21計画」は市の除雪レベルを格段に上げることを目指した10年計画で、委員会運営やフォロー調査を含めて業務のボリュームは大きく、僕にとって大きな経験になりました。

片や、「北方都市会議」(現在の「世界冬の都市市長会」)は、札幌市が世界の北方都市に呼びかけて82年に始まった国際会議。decもISCORD等の国際会議の運営実績をかわれ、関連する調査やイベントの業務を受託。おかげで僕は海外に出かけることが増えましたが、国際見本市で88年にカナダのエドモントン市を訪れたのもその一つ。僕は「雪さっぽろ21計画」のパネルを拙い英語で苦勞して来場者に説明したのですが、関心を持ったモンリオール市の職員が、それをきっかけになんと上司と札幌市に視察に来てくれて、両市の交流推進に一役買うことができました。このころの海外体験は英語を含めて苦勞したけれど、国際的な会議や見本市の運営ノウハウを蓄積する

ことができ、2002年に札幌で開催された第11回国際冬期道路会議(PIARC札幌大会)の時に大いに役立ちました。

decの業務が多忙を極める一方で、92年から5年間、北大大学院工学研究科に社会人入学。博士号を取得されました。

第1回CTC開催をきっかけにした佐伯浩先生との出会いは、僕の人生にとって大変重要なものでした。先生は、ときどきdecに顔をだしてくださり、その都度「君も研究発表しないとダメだよ!」と言われ、僕が橋梁の設計をしていたことを踏まえて、結氷河川に建設される構造物への水の影響に関する研究論文の共著者に加わるようになりました。僕としては、実質が伴っていない後ろめたさを感じていたので、そのギャップを埋めようと大学院で先生の研究室に入れてもらいました。decの仕事もしながらでしたが、修士課程2年間は大学での研究を中心に、博士課程3年間は職場に戻って業務の傍ら、天塩川の現地調査や実験をもとに、博士論文を仕上げることができました。このような機会を与えてくれたdecにとっても感謝しておりますが、もう簡単に辞めるわけにはいかないなとも当時思いました(笑)。



実験用の氷の供試体の製作
様々なタイプのチェーンソーを使うのがうまくなりました(笑)。

2000年代に入ると「野生生物と交通研究発表会」の開催をはじめ、decは一層、取り組みのウイングを広げていきますね。ちょうど企画部長になられたころでは。

確かに調査研究部から企画部に移って、自分なりに気持ちを新たにした部分がありました。大学院での研究生活で一番良かったことは、結果や解決方法がわからないテーマに対するアプローチの仕方、具体的には調査や実験

の手法や取り組み方を知ったことです。このころ梅棹忠夫著『知的生産の技術』に共感した方々の研究会活動にも個人的に参加しており、工学以外のアプローチにも関心がひろがっていききました。その中で、大きな影響を受けたのが考現学で、特に触発されたのがそこから派生した路上観察学。そのせいか日常のなかでふと不思議だと思った、気になったりすることを放っておかず、もう一歩掘り下げてみようという意識を持つようになりました。その最初のアクションが「つるつる路面」でした。

冬道を歩いていると転倒事故で救急搬送される人を良く見かけていました。「ひと冬に何人ぐらい救急搬送されているだろう?」がスタートでした。札幌市消防局から提供された資料で調べたら年間300~400人ぐらいが転倒して救急搬送されていることがわかり、性別などの傾向を分析して土木学会北海道支部で発表しました。当初は仕事になるとは思っていなかったけれど、ほどなく受託業務になり、ウインターライフ推進協議会発足にもつながっていききました。

野性動物のロードキル対策も、一歩踏み込んだことが功を奏しました。水の関係の会議でカナダのカムループスという都市を訪れたときのこと、道路に野生動物の進入防止対策らしきフェンスを見かけました。気になって会議の参加者に聞いてみると、ムースやエルクと呼ばれる大型シカ類によるロードキル対策とのことで、職場の同僚が関わっているのを紹介しようと言ってくれました。早速、会いに行ったらカナダのロードキル対策の最新情報に接することができました。そのまま、北海道に適用はできないのですが、その後、「斜里エコロード」という総合的なエゾシカのロードキル対策の施設整備計画を実験を重ねてつくり上げることになる、僕にとって貴重な体験でした。

地域公共交通の計画づくりやモビリティ・マネジメント(MM)の取り組みも2000年代半ばに急展開します。

decが公共交通の計画づくりを手掛けたのは帯広市が最初です。当初、

他社と連携し、部分的に担当していたところを、新しい試みを積極的に提案したりするうちに全面的に受託するようになっていきました。例えば、フレックスバス(予約配車のデマンドバス運行)の実証実験は、国内でも先導的な事例となり、その後の乗合タクシーやデマンドバスが普及するきっかけになりました。

また、MMの原点も、実は札幌です。2000年代に入ってすぐ、北大の高野伸栄さん(現教授)と谷口綾子さん(当時decに在職、現在、筑波大学教授)とともに、札幌開発建設部の委託で交差点の渋滞対策の一環としてドライバー心理に働きかけるソフト施策について研究を行いました。英国の先進例「トラベル・ブレンディング・プログラム」を勉強し、その開発者との交流も経て構築したのが「トラベル・フィードバック・プログラム(TFP)」。

その実証実験をあいの里や江別で実施しました。MMはよりよい交通環境に向けて人の自発的な態度や行動の変容を求めていくものですが、このTFPが国内ではMMの実践例の先駆けだと思います。

そのころ、東工大助教授の藤井聡さん(現在、京都大学教授)の、土木学会だと記憶していますが「社会的ジレンマ」に関する講演を聞き、感銘を受け、早速、札幌でも講演していただきました。さらに藤井さんを中心とした土木学会「態度行動変容に関する小委員会」設立にも加わり、そこでの議論から「モビリティ・マネジメント(MM)」という名称が定義されて一般的に使用されるようになりました。その後、2006年には、(一社)日本モビリティ・マネジメント会議が設立され、第2回大会を札幌で開催するなど、日本でのMMの普及にdecは少なからず貢献をしてきたと思います。

一方で、雪学習や交通環境学習、シーニックバイウェイ北海道の取り組みもこの時期に進展し、「教育」や「観光」という領域でもdecの存在感は大きくなっていきました。

2000年に始まる小学校の総合的学習でぜひ雪の授業をしたいと模索さ

れていたのが、当時、社会科教員の新保元康さん(現在、認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム理事長)。雪対策は技術だけでなく、市民一人ひとりの態度行動変容が大事であり、そこには教育の力が必要だと感じていた僕にとって、この出会いは願ったりかなったりで、共に雪学習に取り組んでいきました。その後、新保さんに協力をお願いしたのが公共交通の利用促進を目的とした交通環境学習(学校MM)の推進です。

除雪や公共交通という社会インフラに関する教育の取り組みを進めるなかで、新保さんはやがて道民が北海道について包括的に学ぶことの意義を提唱され、第8期北海道総合開発計画にも盛り込まれました。decも応援し、認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム設立に進展していきます。

「シーニックバイウェイ」については、毎年ワシントンDCで開催される「米国交通運輸研究会議(TRB)」に、僕が雪氷関係の発表で出席していたこともあり、展示ブースに米国シーニックバイウェイのコーナーがあって、資料をもらったり、取り組みを聞いたりしていたので、情報としては知っていました。北海道で具体的に導入を牽引したのは小樽開発建設部道路課長時代の和泉晶裕さん(元国土交通省北海道局長)で、石田東生さん(当時、筑波大学教授)を委員長とした委員会で議論や実践を重ね、2002年には米国視察調査も行って「シーニックバイウェイ北海道」の構想がまとめられました。僕も、企画段階から参加していますので20年以上にわたって携わってきましたが、米国連邦道路庁のシーニック担当部長を招聘して講演会のあと、当時の北海道開発庁事務次官の表敬訪問に同行したときに通訳をさせられ、冷や汗をかいたことが僕の黒歴史の一つに残っています(笑)。

さらに、ニセコ地域と旭川地域のモデルルートでの2年間の検証の後、制度が出来上がり、現在は指定ルートが14、候補ルートが3つで、全道をカバーする規模に拡大しています。decは、伴走型に地域をサポートするルートコーディネータの配置や情報誌の発行等の中間支援機関として、シーニックというプ

ラットフォームを支える一助となっています。また、石田先生のご尽力もあり、北海道で芽吹いた取り組みは今や「日本風景街道」として全国に広がっていることをとても誇りに思っています。

decの事業展開や成果について話題は尽きませんが、あらためて、これまでdecが目指してきたこと、また、これから目指すべきことについて教えてください。

僕がdecで40年間も勤続できた背景には北海道への強い思いがあったからだと思います。以前、新しい情報は、東京経由で北海道というのが一般的でしたが、雪氷、野生動物等、地域特有の問題や課題は、自分たちが直接、道外や海外に取りに行き、全国に提供するような存在にdecが、あるいは北海道になるべきだと考えていました。それには「とりあえず(現場に)直接行っちゃう」という気概が大切だと思っています。

もう一つ大切だと思うのは、ほしい情報を得るためには自分から率先して発信すること。内外の学会や研究会で発表を重ねてきた経験からすると、自分がしたいことがあれば、聞き手に回って情報収集するより自ら発信、発表する方が情報ははるかに効率的に集まります。dec職員には、小さなことでもいいので率先して情報発信をしてほしいですね。

また、僕がCTCを開催する時に心がけたのは、学術や行政における既存の分野の仕切りを取り払って、関心を持つ人なら誰でも参加できる敷居の低い情報交換の場をつくることでした。「野生生物と交通」研究発表も、エコロジカルな人とエンジニアリングな人が、領域と立場を越えて、直接議論できる場をつくろうと始めました。

そこでやってきたように、decの役割は、関心を持つ人なら誰もが参加できて、自由な意見交換の中から新しいものを生み出していけるプラットフォームをつくり、支える事だと思います。そしてdec職員には、つるつる路面の例がそうであったように、社会問題になる前の潜在的な現象をとらえ、それを一歩踏み出して究明する姿勢を大切にしてほしいと願っています。

dec設立40周年記念事業

冬のくらし アイデアコンテスト 発表会

decは設立40周年記念事業として全国の高専生・大学生・大学院生を対象に「北海道における持続可能な冬の暮らし」についてアイデアを募集しました。2023年7月の募集開始から10月末までに31件(道外17件)の応募があり、第一次審査を通過した5組が札幌の発表会に臨みました。5名の審査員と来場者約100名が見守るなか、北海道の冬や雪に新たな視点を投げかけるプレゼンテーションが次々に行われ、若い発表者の熱意に盛んな拍手が送られました。審査の結果、最優秀賞1組(賞金30万円)、優秀賞2組(同10万円)が決定し、賞金とともに音威子府村の木エクラフトの表彰楯が贈られました。発表会の模様をご報告します。

【日時:2024年2月29日(木) / 場所:札幌市民交流プラザ / 主催:dec / 協力:(株)北海道新聞社、(株)エフエム北海道AIR-G'、認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム、(一社)シーニックバイウェイ支援センター / 後援:国交省北海道開発局、北海道、札幌市】

受賞5組の発表内容など詳細はdecのHPをご覧ください。



開会 挨拶 dec 理事長 倉内 公嘉

昨年4月に満40周年を迎えたdecでは、若手職員で記念事業の企画を練り、様々な企画が展開されましたが、今回のコンテストも記念事業の1つとして開催に至りました。出足が遅くて懸念された応募数も31件を数え、社会貢献度や新規性、実現可能性などの審査基準で選考し、5組に絞りました。本日の発表はdecの自主研究の対象としても注目させていただきますが、会場のみなさまには楽しみながら冬の暮らしを考える機会にしていいただければ幸いです。

プログラム

- 13:30 開場・受付
- 14:00 開会(開会挨拶・審査員紹介)
- 14:10 二次審査会
- 15:40 弦楽四重奏コンサート「弦で奏でる四季の音色」
佐藤 郁子 氏(ヴァイオリン)、
富田 麻衣子 氏(ヴァイオリン)、
青木 晃一 氏(ヴィオラ)、坪田 亮 氏(チェロ)
※この間、審査員による最終審査。
- 16:10 休憩
- 16:30 審査結果発表・表彰式
- 17:00 閉会



司会 加藤 真奈美 氏
(気象予報士)



弦楽四重奏コンサートの様子



NPO法人ecoおといねっぐ制作の木製表彰楯
(材種:ミズナラ 産地:北海道)

受賞者 コメント



最優秀賞

「愉雪の巡い(ゆうせつのうつろい)」

札幌市立大学 [原 さとみさん、中川 斐世利さん、野々川 葉奈さん]

原さん: 最優秀賞をいただけて嬉しい気持ちでいっぱいです。普段はデザインを通して建築の勉強をしているので、デザインと建築の両方を活かして公園を考えるという取り組みが、この北海道を舞台にできたことをとても嬉しく思っています。



優秀賞

「第五の公営競技『競雪(けいせつ)』」

北海道大学大学院 [鷺見 聡一郎さん、丸崎 佳希さん]

鷺見さん:「公営競技」というチャレンジングな題材で発表させていただきました。まさか公営競技で払い戻し金以外にお金を獲得できとは思っていませんでしたので、嬉しい限りです。いただいたお金をどう使うかは言えませんが(笑)、大事に使います。



優秀賞

「Snow Safety Stick」

茨城工業高等専門学校 [カモンパット・インタウォンさん、饗庭 陽月さん]

インタウォンさん: まさか私たちが受賞するとは思っていませんでしたので、驚いています。まだこれから開発すべきことが残っているので、開発のきっかけとなった私のおばあちゃんを想像しながら頑張って開発を続けていこうと思います。



入賞

「ゆきんこお野菜冬畑」

北海商科大学 [安曇 灯里さん、伊藤 七海さん]

安曇さん: このような大会の場は初めてで、みなさまの胸を借りる気持ちで参加させていただきました。私自身のプレゼンはまだまだで、すごく勉強になることばかりでした。この経験を今後に活かしていきたいです。



入賞

「幻想的な空間で個別映画館-movie in ice-」

大阪大学 [大内 明希さん]、大阪経済大学 [松平 和哉さん]

大内さん: このような機会を設けてくださり、ありがとうございました。自分自身、北海道に来たのは初めてで、札幌は想像していたより寒く、かまくらは少し難しそうだと感じました(笑)。これからまた修正を加えて自分なりにどこかで再挑戦してみようと思います。



詳細につきましてはdecのHPをご覧ください



審査員 講評

審査委員長

北海道大学大学院工学研究院
土木工学部門 教授

高野 伸栄 氏



今や開発技術は「共創の時代」で、いかに人の心をつかみ可能性を共有するかが大事です。心をぐっとつかまれる発表は多く、審査には苦労しました。充実した内容に感謝します。

審査員

CREATIVE OFFICE CUE
タレント

鈴井 貴之 氏



雪解けの時期も含め北海道の長い冬を柔軟な発想でポジティブなものに転換しようと考えてくださったことに感銘を受けました。道外の方の参加と健闘も嬉しく、本当に感謝です。

審査員

(株)北海道新聞社
代表取締役社長

宮口 宏夫 氏



発表はいつでも「雪を楽しむ(楽雪)」「雪を愛でる(愛雪)」を起点に発想され、雪の暮らしに親和性を持って楽しむことの大切さを学ばせていただきました。どうも、ありがとう。

審査員

国土交通省
北海道開発局 局長

柿崎 恒美 氏



非常にイノベティブな提案やICTを活かしたアイデア、また北海道の食と観光につながる発表が多く、嬉しく思いました。いろいろな意味で発見があり、感謝申し上げます。

審査員

dec 理事長

倉内 公嘉



私の審査の観点は雪国の課題をどれぐらい自分のものとして実感的に捉えているかということでした。魅力的な発表のおかげで、非常に盛り上った会となりました。審査員の方々、会場のみなさまにも主催者として御礼申し上げます。

dec設立40周年記念事業のご紹介

昨年度、decは設立40周年の記念として5本の事業に取り組みました。その内2つが、前頁でご紹介した「冬のくらしアイデアコンテスト」、decマンスリー新年号(1月号)でご紹介した「五感で感じる『空ヲ知ル』空知ingアイデアソン」になります。今回は、まだご紹介できていないその他3本の取り組みについてご紹介します。

目指せ!シーニックマスター!

「シーニックバイウェイすごろく」の作成

シーニックバイウェイをより身近に感じてもらうため、北海道の17ルートで取り組まれている活動やルートおすすめの美しい景観をゲーム要素として取り入れたすごろくを作成しました。他にも、北海道の特産品や観光スポット、各地域を象徴するイラスト等も盛り込まれているため、すごろくとして楽しく遊びながら北海道の魅力を再発見することができます!

decのHPからも無料ダウンロードできますので、ぜひご家庭やお友達同士で楽しんでください!



おもちや開発者 高橋氏との打合せ



社内でテストプレイを重ねました。



令和6年6月1日から

decのロゴをリニューアルします!

現在のロゴは、dec創立10周年の記念事業の一つとして制定され、長く愛用されてきましたが、時代の変化やdecで取り組む事業も設立当初から様変わりしてきたことから、設立40周年の節目に新しいロゴに刷新することとなりました。

新しいロゴを作成するのにあたり、株式会社自然農園(デザイン会社)のご協力を得て、社内でワークショップを行い、ロゴに込める意味やコンセプトを創り上げるプロセスを踏まえました。

新しいロゴに込めたdecの思いを新たに、これからの新しいdecへと進んでいきたいと思ひます。



インタビューの様子



ワークショップの様子

ロゴ作成の流れ

STEP 1

decの文化・理念等の再認識

dec経営層に対するインタビューの実施。

STEP 2

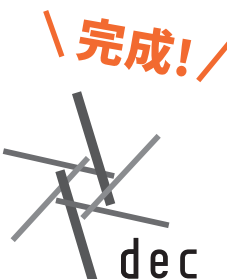
decのアイデンティティや立場についての意見交換

経営幹部、各部署の選抜者、デザイナー(自然農園)によるワークショップを開催。

STEP 3

全社員で投票

ワークショップでの意見を踏まえ作成したロゴ案から全社員で投票を行い決定。



decの新しいアイデンティティとロゴ



多視点、という、未来志向

わたしたちは、各々が豊かな個性を持つ集団です。あらゆる角度から、ものごとを捉える視点。問いを見つけだし、課題の本質を探究し、それぞれの人の立場を理解し並んで歩む視点。これからの地域や社会のために必要な、多視点をもっています。さまざまな人の思いは、わたしたちが関わることで、延伸し、交差し、ひとつの美しいかたちをつくりだすことで、輝きを増します。「光は北から。」創業ときに掲げた言葉を体現してきた、decのアイデンティティ。新たなマークに受け継いで、未来へと進みます。

明日をキヅク

HBCラジオ「明日をキヅク」

HBCラジオ「明日をキヅク」という番組の放送で弊社decの様々な事業・取り組みが紹介されました。

「明日をキヅク」という番組は、産業・経済・インフラ等の社会や地域の課題・問題等を放送しており、タイトルの「キヅク」は、そうした課題に「気付いてほしい」、新しい未来を「築く」という両方の意味を含んでいます。

令和5年4月2日の放送から始まり、毎月第1日曜日、10時45分～11時までの15分間、計12回放送されました。



第1回 2023年4月2日放送 出演:理事長 倉内公嘉



第2回放送 出演:原理事・中前上席



第4回放送 出演:新保理事長 (NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム)



第6回放送 出演:鹿野主任



第8回放送 出演:永田次長

放送年月日	テーマ	関連キーワード
令和5年4月2日(日)	●decの主な事業紹介 ●年間月別 放送内容紹介	冬みち対策、ロードキル、地域公共交通、シーニックバイウェイ、ほっかいどう学
5月7日(日)	●シーニックバイウェイの概要	シーニックバイウェイ北海道の概要、ドライブ観光の推進、秀逸な道、企業との連携
6月4日(日)	●サイクルツーリズム	SBWとサイクルツーリズム、サイクリスト受入環境の充実、情報発信
7月2日(日)	●ほっかいどう学(全体概要)	ほっかいどう学の概要、みち学習プロジェクト、NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム
8月6日(日)	●シーニックバイウェイ(夏・秋)	植栽・清掃活動、シーニックデッキ、シーニックカフェ、道の駅との連携
9月3日(日)	●エゾシカ等野生動物との交通事故(ロードキル対策)	ロードキル発生件数、エゾシカの季節的行動変容、ロードキル対策(侵入防止柵等)、注意喚起パンフ
10月1日(日)	●寒地技術の紹介	寒地技術シンポジウム、日中冬期交通WS、道内EV充電器設置箇所数、EV充電器マップ
11月5日(日)	●冬期道路交通問題(ツルツル路面対策)	ツルツル路面対策、吹雪・視程障害対策、特許
12月3日(日)	●冬期道路交通問題(除排雪)	北海道の除雪事故、雪かきのコツ、雪下ろしのコツ
令和6年1月7日(日)	●シーニックバイウェイ(冬)	SBWの意義と目標、ルートコーディネーター、シーニックナイト
2月4日(日)	●ほっかいどう学(雪学習)	除排雪の歴史、雪学習、雪体験授業
3月3日(日)	●地域公共交通	地域交通の課題、MM、ICT、MaaS

明日をキヅク

各回の放送は、decHP及びHBCラジオのPodcastで聴くことができます。

decHPはこちら▶



HBCラジオ(Podcast)はこちら▶

